

7. 7対1看護師配置に伴う看護の変化

信州大学医学部附属病院 加藤 祐美子

1. 実践の概要

当院では平成20年6月から7対1看護師配置の体制となり、4月に大勢の新人看護師を迎えた。当初は新人看護師に対する教育、指導などサポートしている。日勤の看護師は増加したが夜勤の看護師数は依然と変わらない。業務調整や整理を行い、早出、遅出勤務者を配置するなど看護必要度の高い時間帯に多くの看護師を配置するような工夫をしている。このような状況下で業務量がどのように変化したか昨年度と比較することにした。また医師から業務移譲された内容についても調査した。

2. 実行計画

当院では平成元年から業務量調査を実施している。病棟勤務者は10月第1週の月曜日と決めて24時間のタイムスタディを算出し、比較検討をしている。その業務量調査結果から、19年度との比較を総業務時間、直接看護に関わる時間、超過勤務時間について実施した。

医師からは看護師への業務委譲の声や研修医減少に伴う診療補助業務の見直しの結果、各病棟の採血や静脈血管確保を前年度より積極的に実施することにした。全国国立大学病院が実施している調査から当院における、前年度との比較、他の大学との比較を実施した。

今年度、7対1看護師配置となり、どのような業務委譲ができたか、看護師増員となつての意見をアンケート調査をする。

3. 結果

業務量調査の直接看護を昨年と比較した結果、平成20年度は全体で190時間増加していた。看護師一人当たりでは、230分で昨年と変化がなかった。患者一人当たりでは20年が114分、19年が90分で14分増加した。診療の補助に関する項目では、20年度では435時間で昨年より、32時間増加している。看護師1人あたりでは13分減少しているが、患者一人あたりでは20年が46分、19年が41分で5分の増加であった。超過勤務時間については看護師一人当たりの時間は増加していた。

診療の補助について、「国立大学病院における静脈注射の実施について」の調査結果から、平成19年度と20年度を比較すると、翼状針による穿刺については小児科、皮膚科以外は看護師が穿刺しており、留置針については精神科、小児科を含む7診療科では医師が穿刺、他の診療科では看護師が穿刺している。看護師と医師の両方というのは看護師が穿刺できなかった患者や夜間や医師不在時は看護師が行うなど病棟ごとの取り決めて実施している。血管確保や側管注射などは「静脈注射に関する基準」に沿って実践している。

4. 評価

7対1看護師配置となり新人看護師が各病棟に5~6人増員された。新人に対して安全で確実な看護が提供できるように各部署新人教育計画を立案して指導してきた。新人看護師は個性を発揮しながらも着実に成長している。先輩看護師には疲弊感があるが、看護師が増加したことによる余裕の声も聞かれる。平成元年から毎年実施している看護業務量調査を今年度も10月6日(月)に実施した。全体の業務時間は増加し、看護師一人当たりの業務時間に変化は見られなかったが、患者一人当たりの看護量は増加している。若干ではあるが、直接看護量も増加している。新人が安全に看護ができるよう病棟側は配慮したが、調査からは明らかになっていない。安全な看護実践ということで、情報収集や看護ケアなど先輩とダブルで行いようにした。そのためか新人看護師の自律が例年より遅いという声がある。これについては調査からは明らかにされていない。業務量調査からは見えないが、昨年より医師からのインフォームドコンセントに同席することが多くなった、1日の受け持つ患者が少なくなり、ゆとりを持って患者にかかわることができるようになったなどの意見が聞かれる。実際看護研究発表会の場で、看護師増員による看護の充実を発表した部署もある。また、新人を100人近く採用して安全な看護の提供、新人

看護師への病棟全体での支援などで中途退職者が3名と少なかった。

今後、看護師が増員したことによる変化を医師側に意見を聞く予定である。今回は業務量だけの分析となり看護の質まで評価することはできなかった。安全な確実な看護を提供し、考える看護師育成を目指していきたい。